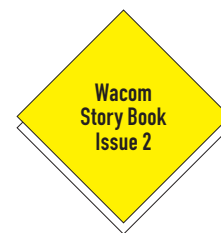


「描く」「書く」を極め、その先の「かく」を拓く



薄い本

わたしたちの
サステナビリティ

Cover Art_日比野 茂木 (Wacom) 『404 Not Found』

Editorial Team : Miki Amano (Wacom) , Emiko Yoshikawa (Wacom)
Design : Naoki Cross (grok Design)

wacom®

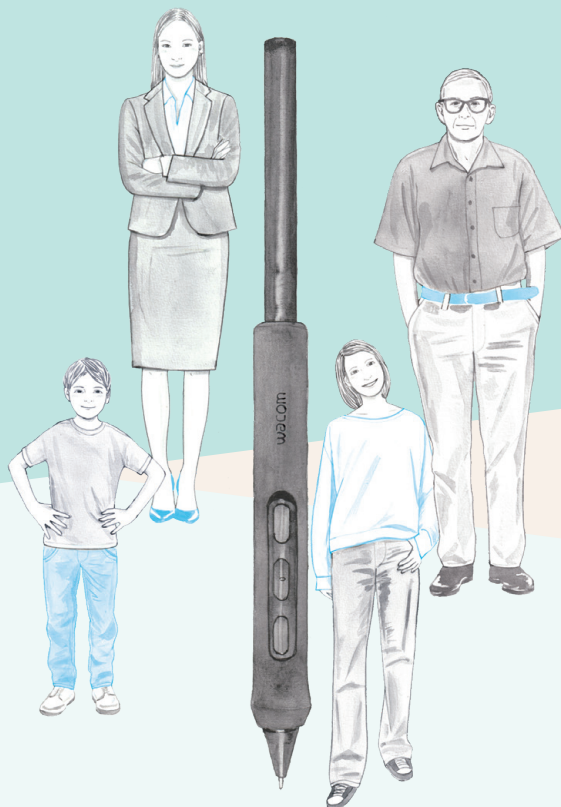
ワコムのサステナビリティ

デジタルペンとデジタルインクの技術を通じて、「描く」「書く」という体験を提供するワコム。中期経営計画「Wacom Chapter 4」では、「描く」「書く」を極め、その先の「かく」を拓くことを追求する。ここではその「かく」を軸に、代表取締役社長兼CEOの井出信孝が、ワコムのこれまでとこれからのサステナビリティとは何かを見つめ直す。

ワコムの存在意義とは？

ワコムは、ライフロング・インク (Life-long Ink) という約束を掲げています。それは、お客様の生涯にわたり「想いや心の有り様が込められた筆跡」(＝インク／Ink)を通じて、体験の旅を届けるという約束です。ペンとインクに関わる技術が実現する究極の「かく」という体験を、提供し続けたいと考えています。

「かく」ことは、創るため、学ぶ／教えるため、働く／楽しむため、そしてより人間らしく生きるために欠かせないことです。だからこそ、「かく」を通じたあらゆる人の表現を、ペンとインクの技術をもって支え続け、寄り添うことがワコムの存在意義になりうるのではないかと考えています。



ワコムが支える「かく」

人類が何万年にもわたって続けている「かく」という行為。その多くがいまだ説明されていないように、人間が「かく」ことを止めないのには何か深い意味があるはず。私たちは、そのような「かく」の次の何万年かを作る一翼を担いたいと思っています。ワコムの「かく」技術は、デジタルを経由することで、時間や空間、文脈を可視化し、つなげたり、超えたりすることができます。何万年の歴史の中で、

なぜワコムの技術が生まれ、今へと続いているのか。そして、なぜ次の未来へとつないでいくべきなのか。その問いへの答えは、「偶然、その使命を背負った」という一言に集約されるのかもしれませんが。いまだ解き明かされていない「かく」ことの本質に向き合いながら、ワコムはこれからも、その意味を探求していきます。

「かく」とコミュニティ

「かく」に関わる領域は、無限ともいえる広がりを持っています。ワコムがそのすべてを網羅することは現実的ではありません。だからこそ、ワコムは、目的や興味を共にする有志が集まった緩やかな共同体、つまり「コミュニティ」との共創関係を大切にしています。コミュニティの中で、ペンとインクの技術やアイデアを磨き上げ、世の中に問いかけて考えています。そして、その問いかけをきっかけに、コミュニティとの信頼や共創の関係をより深めていくことができると信じています。ひと、一人ひとりの「かく」を通じてコミュニティそのものを支

えていきたい。これまでも、これからも、ワコムはコミュニティと共に生きていく覚悟を持っています。

クリエイティブ、学び、テクノロジーなど、さまざまなコミュニティと共に、「かく」を進化、発展させ、未来へ継承していく。そのためにワコムは、「学びの体験を技術で進化させる」「プロクリエイターを目指す高校生たちの可能性を拓く」といった、さまざまな取り組みを通して、新たな体験価値と文化の創出に挑んでいます。目の前で「かき」続ける人たちを、本気で見つめた先に広がる未来があると信じて、私たちはこれからも歩み続けます。

事業・コミュニティ・サステナビリティとの連結

「かく」を支えるという使命を持って事業を進めている一方、「サステナビリティ」というテーマに対して、いまだ問い続けている側面があることも事実です。ワコムの事業成長と、コミュニティと共に生きていくという軸、そしてサステナビリティの取り組み。この全てをひとつの物語として連結させたいという思いがあります。実際に、企業としての社会的責任を果たすべく、気候変動やエネルギー問題といった課題に対しても取り組みを続けています。ですが、それがペンとインクの技術で、ひとやコミュニティの「かく」を支え続けていくこととどのように本質的につながっているのかと問われると、現段階では明確な答えを見い出せていないというのが正直なところ。です。

ワコムは、ひとやコミュニティが抱える課題に対して「かく」を通じてどう寄与することができるのか。技術を追求するときも、新たなコミュニティを築くときも、私たちはいつも問いを起点に考えてきました。問いを立て、対話を重ね、また次の問いへと向かう、その繰り返しの中で道を見出ししてきました。気候変動やエネルギー問題についても同様に、問いから目をそらさず、向き合い続けます。葛藤の先に、ひとやコミュニティにとって大切なサステナビリティとは何かの答えを導き出したいと考えています。道半ばではありますが、ワコムはこの大きな問いに向かって、これからも進み続けていきます。

株式会社リクロスエクスパンション 代表取締役

中嶋崇史氏を 社外取締役に招聘

「ワコムのサステナビリティとは」という問いに対しての議論を深めるため、エネルギー関連のサポート事業を手掛ける中嶋崇史氏を2024年6月に社外取締役に招聘。中嶋氏は、早稲田大学研究室発ベンチャー企業の代表取締役を経て2014年4月に(株)リクロスエクスパンションを設立。早稲田大学環境総合研究センター客員次席研究員の経験を活かし、エネルギー・リサイクル分野のビジネスプロデュースを専門とする。自らもコミュニティに入り活動をしている中嶋氏から見た、「ワコムのサステナビリティ」について、話を聞いた。



中嶋氏から見たワコムのサステナビリティ

2023年に発行されたWacom Story Book Issue 1を読み、ワコムの「かく」に対する強いこだわりと、それを世の中に届けていく壮大な物語に共感しました。一方で、サステナビリティの取り組みのページを見ると、その物語とつながっていないのではないか、という違和感を覚えたのが最初の印象でした。井出さんが言う、「かく」を通じてひとやコミュニティにどう寄与しているのかという視点と、サステナビリティ・アセスメントの数値としての結果は、本当はつながっているはずなのに、そこに連結が見えないというような感覚を抱きました。

私は、サステナビリティ・アセスメントとは、企業が持つ大きな目的に対して推進した結果としてついてくるものであり、数字ありきの議論は本末転倒だと考えています。本当のサステナビリティとは、数字を減らすことが目標ではないのです。

ワコムは、ひとやコミュニティに対してどんな価値を提供できているのか。その結果としてどういった影響が生まれているのか。そこを改めて見つめ直し、再定義していくことで、本当の物語として伝えていくことができるのではないのでしょうか。ワコムの一員として、そのプロセスを共に歩み、共創していくことが、私の役割だと考えています。

「かく」を通じて ひとやコミュニティを支え、共に生きる

ここからは、コミュニティと共に「かく」を支える取り組みと、サステナビリティ・アセスメントに向き合う2名の担当者が語る、ワコムのサステナビリティの現在地とこれからを紹介する。



WITH AND FOR COMMUNITIES

コミュニティと共に「かく」を支える

- ・「手書き×デジタル」で学びを進化させる Z会との取り組み
- ・高校生の可能性を拓く「CREATEプログラム」 シスラー高校との取り組み

FROM SUSTAINABILITY ASSESSMENT POINT OF VIEW

サステナビリティ・アセスメントから見つめる

- ・「かく」を絶やさないためにできること
- ・ワコムの環境負荷低減への道とは

コミュニティと共に「かく」を支える

INITIATIVE 01 Z会との取り組み

「手書き×デジタル」で学びを進化させる

ワコムと学びのコミュニティを共にする一社がZ会だ。Z会とワコムは、「手書き」の価値と重要性に深く共感し、それぞれの強みを生かした連携により、教育分野の新たな価値を創造していくことを目指している。2020年からは、「手書き×デジタル」を活用した新しい学習サービスを協業で進めてきた。

2024年にリリースした「学び検索チエノワ」もそのひとつ。「学び検索チエノワ」は、Z会が「手書き学習」と多様な教育サービスを通して長年蓄積してきた膨大な学習の知見を、ナレッジグラフという技術で体系化した検索ツールだ。学びの過程で気になる用語やわからない用語を検索すると、解説を確認したり、その用語に関連した問題に取り組んだりすることができる。また、関連する用語のつながりを視覚的に把握できるのも特長だ。例えば「二酸化炭素」を検索すると、「気体の性質」や「仕事とエネルギー」などの関連用語が複数表示される。そこからさらに興味のある用語をたどっていくと、理科の光合成だけでなく、化学式、社会科の地球温暖化、歴史の京都議定書まで、幅広く関連する知識に触れることができる。このように、学んだ事柄に関連のある知識を教科や学年を超えて自然な形で結びつけ、興味や関心に応じて体系的に知識や理解を深めて

いく探求型の学びを実現している。

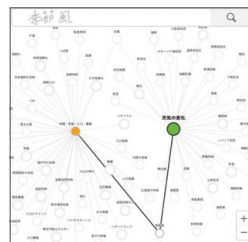
学習サービスとしての実装を支えるのは、エスディーテック株式会社（以下、エスディーテック）との共創である。ワコムとエスディーテックは2021年より資本提携を結び、教育分野をはじめとするさまざまな領域で手書き技術とAI技術を活用したサービス開発に取り組んでいる。「学び検索チエノワ」は、ワコムが蓄積してきたナレッジグラフの技術と、エスディーテックのUI/UXおよびAIの実装力が融合することで誕生した。本サービスには、「手書き×デジタル」で新たな学びの体験届けたいという、Z会を含む三社の共通する想いが反映されている。

さらに、2024年は、筆記具メーカーの株式会社パイロットコーポレーション（以下、PILOT）との共創も加わり、デジタル版「Dr.GRIP」がZ会に登場した。疲れにくく使いやすい筆記具として愛



PILOTと共同開発したZ会ユーザー専用の「Dr.GRIP DIGITAL type AZ01」。

され続けてきたDr.GRIPをベースに、ワコムのAES技術を搭載した「Dr.GRIP DIGITAL type AZ01」は、Z会専用タブレットに最適化している。Z会ユーザー（一部の学年に提供）は、書き疲れを気にせず、デジタルペンを走らせることができ、より学習に集中できるようになった。ワコムがZ会と取り組む「手書き×デジタル」の学びの探究は、エスディーテックやPILOTとの協業にみられるように、コミュニティの輪を広げながら、学びの選択肢を増やし、新たな体験の創出へとつながっている。この取り組みを担うテクノロジーソリューション・セールスチームの能美司と佐々木瞭は、Z会での学びを通じて、生徒たちが大人になっても「手書き×デジタル」への親しみや学び続ける意欲を持ち続けられるよう、今後も「かく」ことで学びの進化を目指していきたいと語っている。



「学び検索チエノワ」画面：検索キーワードに関連した用語がナレッジグラフとして表示される。

ワコムは、目的や興味を共にする有志が集まった緩やかな共同体を「コミュニティ」と表現している。ワコム自身もコミュニティの一員として、コミュニティとの共創の中で、ペンとインクの技術やアイデアを磨き上げ、「かく」ことに貢献したいと考えている。その一例として、「かく」の可能性をワコムと共に探求する、株式会社Z会（以下、Z会）とカナダ・シスラー高校との取り組みを紹介したい。

INITIATIVE 02 シスラー高校との取り組み

高校生の可能性を拓く「CREATEプログラム」

カナダのマニトバ州ウィニベグにあるシスラー高校が運営するCREATEプログラム。2D/3Dアニメーション、ゲームデザイン、映像制作などの経験を通して、さまざまなクリエイティブスキルを身につけ、進学やクリエイティブ業界へのキャリアパスを支援する無償のプログラムだ。CREATEプログラムには、アニメスタジオなどクリエイティブ業界や教育機関など、20超の企業・団体が参加し、その一員としてワコムは、毎年、生徒主体で行うプロジェクトのひとつをサポート。プロのアーティストによる講演会の開催や、CREATEプログラムを通して制作した作品の完成を祝う表彰式など、多角的な支援を行っている。

CREATEプログラムは、創設以来、高校生を対象とした先進的な

教育プログラムとして広く注目を集めている。世界中の大学生、専門学校生、高校生が参加する「24 Hours Animation Contest for Students (Legends Animated主催)」で毎年優秀な成績を収めており、CREATEプログラムで培ったスキルと学びの成果を示す一例といえる。2023-2024年度は、いじめの影響をテーマにしたウェブコミックを制作。生徒一人ひとりにとって身近であり、強い関心を寄せる取り組みとなった。教員たちも生徒の可能性を広げるため、メディアの枠を超えた制作活動を支援。その結果、QRコードを活用したオンラインのショートアニメーションと連動するコミックブックが完成し、CREATEプログラムにおいて初のメディアを横断した作品が誕生した。

CREATEプログラムに参加する生徒の多くは、カナダでの第一世代の移民で、学校の外でもさまざまな課題に直面している。共働き家庭が多く、生徒たちが家庭で担う役割も大きい。CREATEプログラムは、そうした生徒たちがクリエイティブ分野への情熱を育み、自信を深め、将来の進学やキャリアにつながるスキルを身につける機会を提供している。この取り組みを推進し、生徒たちのメンターとしてプロジェクトを支える、ワコム テクノロジー・カナダチームのディブ・ボルトンは、「かく」ことを通じて、生徒たちが自らの可能性と選択肢を広げ、成長していく機会を提供できることに大きな意義を感じている。



サステナビリティ・アセスメントから見つめる

「かく」を絶やさないためにできること

国際基準と照らし合わせて、サステナブルな重要課題の洗い出しを進める天野聡。長年培った国内外での営業としての経験から、サステナビリティを企業価値の向上や事業機会の創出につなげたいと考えている。ワコムがこれからも「かく」を支えていくために、サステナビリティをどのように捉えることができるのだろうか。現在の取り組みやワコムにおけるサステナビリティの可能性について話を聞いた。

営業の経験から考えるサステナビリティの可能性

20年以上にわたって、医療、金融、行政機関のお客様に対し、申請業務や文書管理などのワークフロー最適化に向けたデジタルインクソリューションの導入を支援してきました。法人営業として、毎日のようにお客様を訪問し、提案した技術や製品がニーズに合致する瞬間に数多く立ち会うことができました。その後、現在の担当であるサステナビリティ・アセスメントの分野に挑戦することになり、営業時代の経験から、企業価値の向上に寄与するサステナビリティに携わりたいと思うようになりました。

分析を進めていく中で 浮き彫りになった課題と光明

最初に行ったのは、社内のさまざまな部署へのヒアリングと情報収集でした。サステナビリティ・アセスメントでは、製品作りの過程でサプライヤーがどこから原材料を調達しているかといった、社外での管理下にある情報も評価対象になります。誰に何を確認すればよいのか、どのガイドラインを参照すればよいのかなどもわからず、大変な作業でした。また、ヒアリングを進めていく中で、自分たちの取り組みは社会に対してどの程度貢献できているのだろうかという葛藤を感じることもありました。それでも、30人以上の社内担当者へのヒアリングと分析を繰り返すなかで、ワコムが何を重要視しているのかが見えてきたのは収穫でした。

初めて担当する分野だったこともあって、100を超えるセミナーに参加して学びを深めました。サステナビリティの基準や情報は日々アップデートされるので、とにかく追いつくのに必死だったのを覚えています。サステナビリティ・アセスメントは、会社にとってはリスク管理という側面もありますが、会社への信頼や新たな事業機会につながる可能性もあります。そのポジティブな側面が自分のやりがいにつながっています。



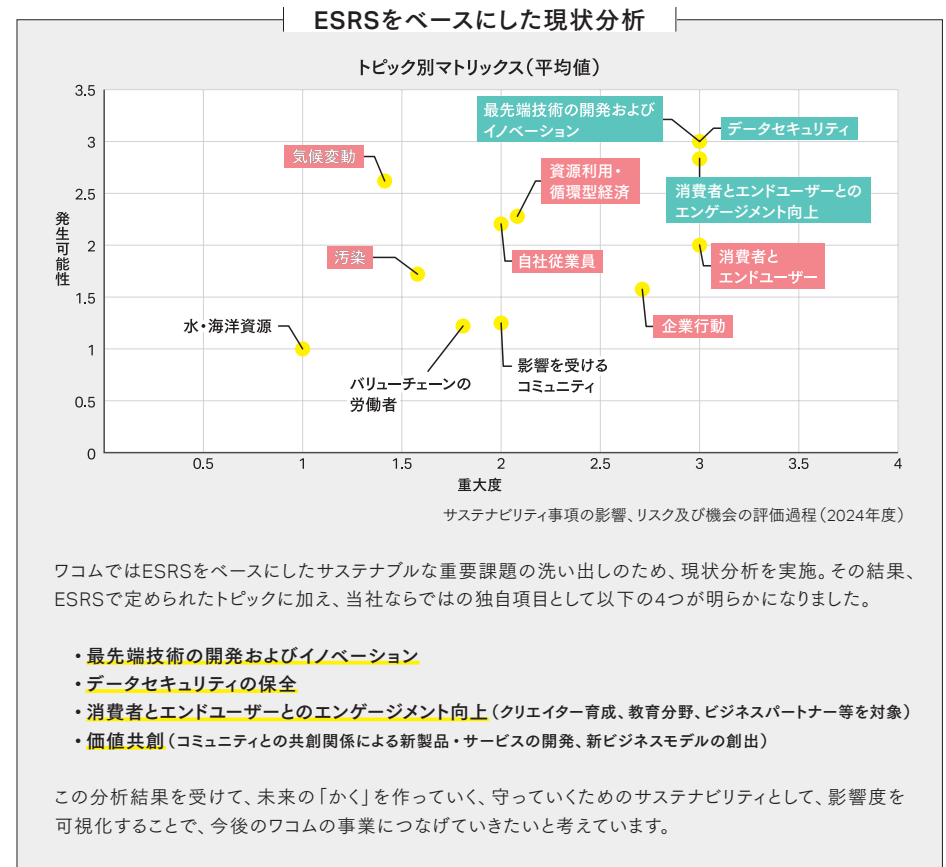
天野 聡

ワコム
テクノロジー&エクスペリエンス
サステナビリティ エキスパート

「かく」を支えるワコムのサステナビリティ

サステナビリティに携わって感じたのは、ワコムがこれまで積み重ねてきたトライ&エラーの過程やそこで培われた技術も含めて、「かく」という行為がひとを支えているということです。時代の流れの中で、「かく」ことの在り方も変わっていくかもしれませんが、また、液晶画面に書く・書くことがより身近になり、紙の価値が変化すれば、紙に書く機会が減少する未来が訪れるかもしれません。そのなかで「かく」の何万年か先の未来を作る・守っていくという使命は、非常に重要で、単なる一企業のサステナビリティの枠を超えた責務だと感じています。手書きの価値をこれからも探究していくなかで、ワコムが技術とコミュニティをつなぐ橋渡し役になればたら理想的ですね。

「ESRS（欧州サステナビリティ報告基準）をベースとした現状分析」（図参照）は、未来に向けた第一歩です。サステナビリティの観点から、事業やコミュニティへの影響度を可視化することで、ワコムが優先して取り組むべき課題を明らかにしていけると考えています。サステナビリティへの取り組みは、ワコムが大切にしている「かく」を通じて、ひとやコミュニティに寄り添うためのアクションでもあるということにより広くお伝えしていきたいです。投資家の方々だけでなく、取引先やユーザー、そしてチームメンバー（ワコム社員）のみなさん対話を重ねていくことで、ワコムの「かく」とサステナビリティの物語が繋がっていくのではないかと考えています。



サステナビリティ・アセスメントから見つめる

ワコムの環境負荷低減への道とは

サステナビリティとは、単に数字を減らすことだけが目的ではない。気候変動が激しくなっている中で、「かく」を支え続けるために、ワコムにはどういった環境負荷への課題があり、それに対して何ができ、それがどのような意味を持つのか。ISO規格を遵守し、適切に運用するための中心的な役割を担う冨塚英省が、ワコムの環境サステナビリティの今を伝える。

“ものを作り続けているだけではない”という想い

私は前職を含めると、25年以上サステナビリティに携わっています。当時から「このままのものを作り続けているだけではない」という強い想いがあり、それはワコムで働く今も変わっていません。たとえワコムが環境負荷低減に取り組んでも、CO₂排出量の多い産業と比べれば、その寄与は限定的かもしれません。それでも、再生可能エネルギーの活

用や再生材の利用を推進することは、長期的には必ず社会の役に立つと信じています。こうした努力を継続することこそがサステナビリティの本質だと捉えており、最終的にはお客様、投資家、コミュニティ、チームメンバー（ワコム社員）、そして事業に還元されていくと考えています。

「かく」を支えながら、環境負荷を減らす

2023年に発行されたWacom Story Book Issue 1での報告以降、GHG(温室効果ガス)排出量を毎年確実に削減するなど、着々と取り組みを進めた結果、2024年度は企業や自治体等の気候変動対応の評価指標であるCDPスコアで「A-」を取得しました。また、メカニカルテクノロジーチームの取り組みとして、製品やサービスがライフサイクル全体を通して排出するGHGをCO₂に換算するCFP(カーボンフットプリント)の算出が実現したことは大きな成果だと考えています。

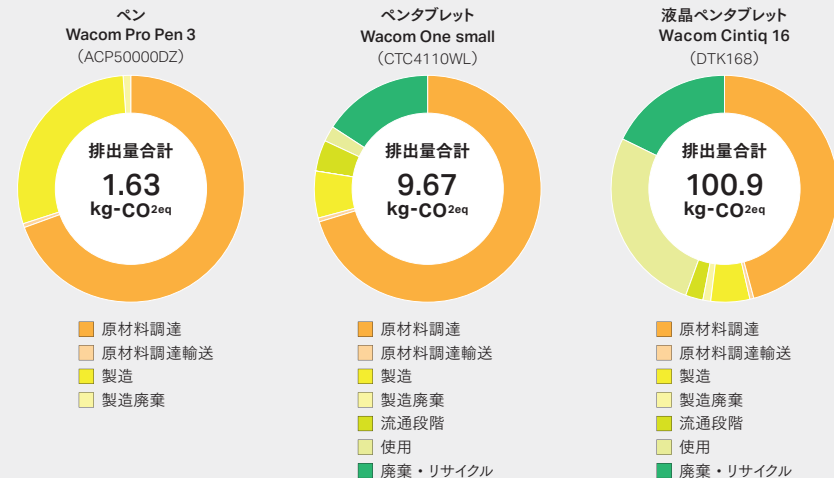
自社工場を持たない当社製品の辿るライフサイクルは、まずは部品が作られ、それらが組み立てられて製品の最終形としてワコムに納品され、お客様のもとに出荷されます。そしてお客様のもとに届いた製品は一定期間使用され、最後は廃棄に至ります。この一連の製品ライフサイクルの中で、CO₂は排出され続けています。一つの部品に関わる原材料だけでなく、輸送経路やベンダー企業の水の使用量など

を含め、必要となる膨大な量の調査を行い、作業を重ねた末、数値として明らかにしたものがCFP換算データ(右ページ)です。

このデータを見ると、部品の原材料が占めている割合が大きいです。つまり環境負荷を減らすことを目的とするのであれば、極端な話、部品、ひいては製品を作らなければよいということになってしまいます。しかし、ワコムは「かく」を支える企業として、道具屋として、製品を作らないという選択肢はありません。私たちは、数字を減らすことを目的にするのではなく、「かく」ことを今後も持続していくために、そしてこれからも魅力的な製品を生み出し続けていくために、どのようなバランスを取りながら環境への取り組みを進めるべきかを考える必要があると思っています。そのために、適切な情報を開示し、現状を正確に把握できるよう努めていきます。

主な当社製品のCFP算定結果と分析

※2025年5月時点



今回算定したペン、ペンタブレット、液晶ペンタブレットのCFPを比較すると、最大で約6倍から60倍の差が見られます。CFPの削減には、部品点数の削減、製品の軽量化、リサイクル材料の活用といった取り組みが効果的であると考えられます。

※ 今後、算定ルールの変更や原単位の見直しによりCFPの数値は変更になる可能性があります。記載の数値は概算であり、参考値としてご理解ください。

環境負荷低減の取り組みを進め、情報開示を推進

今後も、ネットゼロ目標の設定、気候移行計画の策定、生物多様性の方針策定などさまざまなことに取り組まなければなりません。取得したCDPスコア「A-」の維持・改善に努めていくことも重要です。

ステークホルダーの方々に、ワコムのサステナビリティに対する考え方や活動を理解していただくためには、ワコムがやるべきこと・できることを見極め、一つひとつ実施し、その内容を確実に情報開示していくことしかありません。また、サステナビリティへの強い想いを持ち、取り組むメンバーの成果を開示することにも意義があると考えています。さまざまな取り組みを積み重ねた結果を実績につなげるため、今後もさまざまな部署と協力して邁進していきます。



冨塚 英省
ワコム
レギュレーション&ISOグループ
ディレクター